

# 【R7年度事業概要】中部国際空港における海上アクセス活性化事業

- 中部国際空港と三重県を結ぶ唯一の定期航路である津エアポートラインは、1日15往復30便が就航していた**2019年度において27万人が利用して**いましたが、コロナ禍の影響により2020年度の利用者数は約2.5万人へと急減しました。その後は一定の回復傾向がみられるものの、**2024年度の利用者数は約19万人**にとどまっています。海上アクセスの運航状況については、空港における就航便数の動向および利用者数の増減が大きな影響を及ぼします。
- **インバウンドを中心に航空旅客需要も回復しつつあるなか**、中部国際空港では滑走路の大規模補修時における継続的な運用や完全24時間運用を可能とする**代替滑走路の整備に着手**されており、LCCの就航増加などを背景として、最終的には発着能力が大幅に増える見通しもあります。これらの状況を踏まえ、海上アクセス利用者の実態を把握するとともに、**積極的な情報提供に基づく行動変容による需要創出**に向けた検証を行いました。

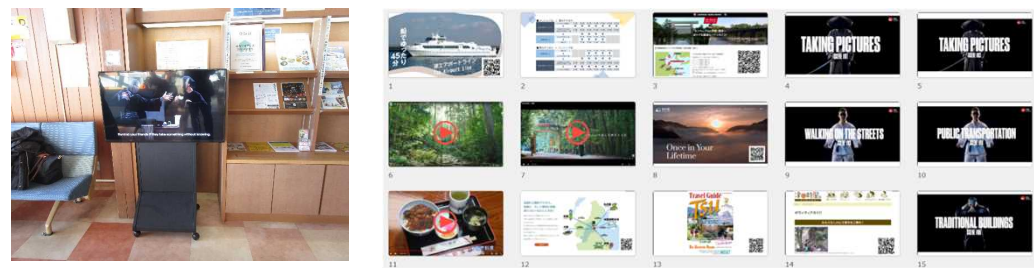
## ■情報発信(デジタルサイネージ等)

- ・海上アクセスと公共交通機関の乗り換え情報、港周辺の観光情報を円滑に収集できるよう、必要な情報を盛り込んだリーフレットを作成しました。
- ・旅客船ターミナルの待合室において、地域の観光情報や日本におけるマナー等の情報発信を行うため、デジタルサイネージを設置し、動画および静止画による情報提供を実施しました。

### ○案内用リーフレットの作成

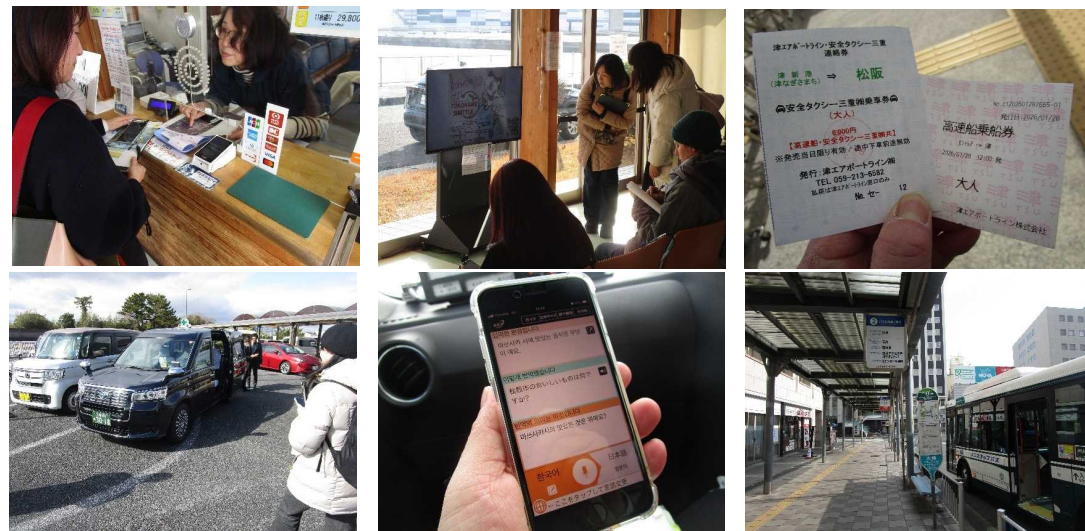


### ○デジタルサイネージの設置



## ■外国人モニター調査

- ・モニターツアー調査は、外国人のインバウンド利用者の視点から、海上アクセスに対する評価およびニーズ等の意見を聴取する目的として実施しました。
- ・案内、サイン、情報提供に関しては、多くの改善すべき事項が指摘されました。
- ・デジタル対応としてMaaS体験を実施しましたが、MaaSの概念に基づく評価においても、改善すべき事項が指摘されました。
- ・船、バス、タクシーの乗車体験においても、利用前後の情報提供方法等に関し、多言語対応を含む改善すべき事項が指摘されました。



調査により、海上アクセスの利用実態、利用者ニーズ、モニターによる意見等、海上アクセスの魅力向上に向けた指摘について整理することができました。

- 【ハード対策】津エアポートラインの維持・存続に向けては、物理的な移動基盤を強化するハード対策が重要であることが確認されました。とりわけ、船舶自体の魅力向上を図る必要があり、快適性や速達性の向上を通じて、観光客や域外利用者から選択される交通手段としての魅力を高めることを確認しました。
- 【ソフト対策】海上アクセスの認知度向上を図るとともに、海上アクセスを利用した交通行動の促す情報発信の強化が重要であることが示されました。また、津エアポートラインにおいては、船内コンテンツの充実やターミナル(待合室)でのデジタルサイネージの活用等に取り組む必要があることを確認しました。
- ハード・ソフト双方の対策を着実に推進するためには、地域関係者が継続的に協議・調整する場を設け、連携・協働して各種取組を実施する体制づくりが強く求められます。